

残された楽譜と記録から、失われた古楽を甦らせ、いにしへの学芸の有り様を探る

○ 古代東アジア漢字文化圏における音楽の諸相と実態を探る基礎的研究

現代人にとって音楽とは、娯楽や芸術の対象としての意味が大きいのと思いますが、古代東アジア漢字文化圏の人々にとって音楽とは、政治・思想・文学・自然科学等の諸分野と密接に関連するものでした。私は、そのような音楽のうち、礼楽思想と実際の楽理に関わる「楽律」（音律と調）、及び「琴」という楽器（現在は「古琴」「七弦琴」と呼ばれる。所謂「こと（箏）」とは異なる）をめぐる出来事に着目し、楽譜を含む一次資料の調査・発掘・解読といった基礎的研究を行っています。

○ 東アジア最古の楽譜をめぐる広い視座からの研究が評価され受賞

琴は、中国の紀元前に起源し、知識人の必須の教養として現在まで演奏伝承が続き、中国をはじめ日本や朝鮮半島でも学問・思想と共に受容されてきました。実は、この楽器の最古の楽譜は、本場中国ではなく日本に残っています。現在東京国立博物館に所蔵される、唐代の写本、国宝『碣石調幽蘭第五』（以下『幽蘭』と略記）がそれで、私が受賞させて頂いた研究は、この『幽蘭』を取り上げたものです。この楽譜は、東アジア現存最古の楽譜の一つでもあり、世界的に見ても価値のある楽譜です。本研究では、『幽蘭』の中国と日本における来歴を明らかにし、『幽蘭』の価値を見出した江戸時代の儒者荻生徂徠による研究の実態を解明しました。また、『幽蘭』と共に伝えられながらも、所在不明となっていた『琴用指法』（隋唐までの琴の奏法書）を、幸い探し出すことができたので、その内容を解読した上で、それに基づき『幽蘭』の譜を解読し、調弦法についても分析しました。本研究をまとめた拙著は、中国語訳されて近く中国でも出版される予定です。



◆第2回・2013年度受賞 人文科学部門

山寺 美紀子 國學院大學北海道短期大学部 兼任講師
※受賞時：お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
研究院研究員

《受賞研究》東アジアにおける古代音楽の探求と復元
——最古の琴の楽譜、国宝『碣石調幽蘭第五』をめぐる
音楽文献史的研究

○ 古代音楽の実相から人間の学芸の歴史を辿る

現在の研究課題は3点あり、1点目は『幽蘭』と『琴用指法』に関してです。『幽蘭』については、これまで主に中国で、創作的要素を入れて芸術表現的完成度を求めた「打譜」という演奏が行われていますが、実は学術的に見ると未解決の問題が多く残されたままです。私は、『幽蘭』に存する未詳の部分を、『琴用指法』等の同時代の資料と併せて考証し、隋唐以前の琴曲の実像や当時の楽理の実態を明らかにしたいと思います。今は、拙著で結論を下せなかった調弦の問題を、音律も含めて検討し、音にする試みを進めています。

2点目は荻生徂徠に関することです。徂徠は近世日本思想史を代表する儒者ですが、彼が楽理に詳しく、古楽の復元を試みていたことはあまり知られていません。彼の音楽に関する研究と著作、事跡についての全貌を明らかにすべく、研究しています。

3点目は日本における琴の受容史です。この20年ほど各地に赴いて、琴に関する資料（江戸期写本や日本に伝存する中国刊本など）の調査を続けていますが、それらの資料からは、理想の音楽の探求や自己の修養のために行われた音楽の豊かな側面を窺うことができます。

音楽の歴史の一端を紐解き、失われた古楽の実相をできるだけ描出して、人間の学芸の歴史を辿るための一助となるような研究を行っていきたいです。